

フォーマルからインフォーマルへ —中国人留学生の日本語発話資料に見られる言語接触—

浅 田 浩 文

要旨

本研究は、言語接触の観点から、本国でのフォーマルな日本語学習から日本というインフォーマルな日本語環境に接触した中国人留学生4名を対象に、語彙の音便化や縮約について、縦断的に調査したものである。その結果、明らかになったことは、以下の通りである。

1. 音便化に関して、日本人大学生と同様に、中国人留学生の発話の中で相対的に使用頻度が高いものとして「あんまり」「やっぱり」があるが、日本人大学生とは対照的に、中国人留学生に使用されていないものとして「わかんない（かった）」「ばっかり」がある。
2. 縮約形について、日本人大学生の発話の中では、語末 < - (r)o > が頻繁に省略されているのに対して、中国人留学生の発話には、その傾向がまったく見られない。
3. その他、アスペクトに関して、日本人大学生の発話の中では、「テイル」より「テ（イ）ル」が多用されているが、中国人留学生の発話では、最初に「テイル」が使用され、滞日期間が長くなるにしたがって「テ（イ）ル」が混用されている。

【キーワード】言語接触、フォーマル、インフォーマル、「テイル」、「テ（イ）ル」

1. はじめに

本稿は、平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究C-2（課題番号13680366）「日本語学習者の方言意識と产出能力」（研究代表者：浅田浩文）における各種調査⁽¹⁾から、文字化した発話資料（浅田2004）を分析したものである。特に、本国でのフォーマルな日本語学習⁽²⁾から、新たに日本というインフォーマルな日本語環境に接触した際の外国人留学生の言語変化を捉えた研究は少ないと思われる。そこで、本国でフォーマルな日本語教育を受けた中級レベルの中国人留学生の来日直後から帰国までの約1年間を言語接触という観点から調査した。

2. 先行研究

言語接触とは、一般的にふたつの異なった言語がぶつかり合い、互いに或いは一方が変容していくことであるが、本稿では、研究方法として言語構造論的アプローチに着目したい（真田ほか2000: 70）。冒頭で述べたように、本国の主に教室内で形式的なインプットを与えられ、いわば、温室で純粋培養された状態に近い学習者が日本で非形式的な雑音とも言うべきインプットに長期間さらされた場合、学習者の日本語がどのように変容していくのかを構造論的側面から、特に、語彙の音便化や縮約について分析する。

先行研究としては、第二言語としての日本語における語彙の音便化について触れたものは少ない。長友（2002）は、フィリピン人自然習得者に限定して位相表現の使い分け「わからない」「わかんない」について紹介している。川口（1993）は、副詞「やっぱり」の習得状況を語用論的視点から考察している。しかし、コード・スイッチングの観点から、「やはり」と「やっぱり」を区別して論じているわけではない。語彙の縮約に関しても、嶺岸（1999）が様々な形を提示しているが、日本語学習者の発話資料を分析の対象としたものではない。同様に、アスペクトの習得（許1997, 2000, 2002; 黒野1995; 柴田1998; Shirai & Kurono 1998）の中で、部分的に縮約形について触れたものはあるが（菅谷2003）、それを主要な研究テーマに据えたものはほとんどない。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

対象者は、福岡市の私立大学に通う中国人留学生4名と日本人大学生4名である。中国人留学生については、本国（中国大陸）の同じ大学で日本語を専攻しており、中国人教師（男性である年輩の日本人教師1名を含む）によってフォーマルな教育を受けていた。大学入学前の日本語学習の経験はなく、授業以外で日本人との接触はほとんどなかったと答えている。なお、来日直後の日本語能力は、日本語能力試験2級レベルであった⁽³⁾⁽⁴⁾。一方、日本人学生については、2名が福岡以外の出身ではあるが、幼稚園入学前から福岡に居住している。

表1 中国人留学生の背景

中国人留学生	母語	性別	年齢	日本語学習歴	日本語能力	学習形態	来日時期
FRK	中国語	女性	19	1.7年	中級	フォーマル	2002.3
SBR	中国語	女性	21	1.7年	中級	フォーマル	2002.3
ZYK	中国語	女性	19	1.7年	中級	フォーマル	2002.3
TGB	中国語	女性	20	1.7年	中級	フォーマル	2002.3

表2 日本人大学生の背景

日本人大学生	母語	性別	年齢	成育地
RRA	日本語	女性	19	福岡
BHY	日本語	女性	19	福岡
YTA	日本語	女性	19	福岡
GDB	日本語	女性	19	福岡

3.2 データ収集

データの収集は、2002年4月から2003年2月までの間、2ヶ月余りの間隔で計5回おこなった⁽⁵⁾。それぞれ中国人留学生と日本人大学生の2名1組のペア⁽⁶⁾で、約30分間、学生生活や日常生活について自由に話し合ってもらい、その様子を録音録画した。また、会話終了後1週間以内に、録画ビデオを見ながらフォ

ローアップ・インタビューをおこなった。会話時以外は、学内で出会った時に挨拶を交わす程度で、両者の間にほとんど接触はなかった。

3.3 データ分析

録音された会話は、母語の発達過程を研究するために開発された言語データ共有システムCHILDES (Child Language Data Exchange System) を使って表記および分析した。特に、それぞれの調査対象者の発話に現れた言語項目の頻度およびコンテクストに焦点を当てた。調査項目⁽⁷⁾は、頻度に関して中国人留学生と日本人大学生の間で大きく隔たりが見られるものを取り上げた⁽⁸⁾。なお、対象者の単語種類（異なり語数）と単語総数（延べ語数）は、以下の通りである。

表3 調査対象者の発話における単語種類と単語総数

調査対象者	調査項目	1回目	3回目	5回目	複数一括処理
RRA	単語種類	422	455	480	959
	単語総数	2196	1997	2294	6487
	上÷下	0.192	0.228	0.209	0.148
FRK	単語種類	282	333	331	678
	単語総数	1005	1645	1544	4194
	上÷下	0.281	0.202	0.214	0.162
BHY	単語種類	369	462	385	909
	単語総数	1268	1661	1565	4494
	上÷下	0.291	0.278	0.246	0.202
SBR	単語種類	401	408	419	884
	単語総数	1738	1705	1937	5380
	上÷下	0.231	0.239	0.216	0.164
YTA	単語種類	537	627	590	1261
	単語総数	2390	2602	2511	7503
	上÷下	0.225	0.241	0.235	0.168
ZYK	単語種類	259	304	388	713
	単語総数	895	1016	1624	3535
	上÷下	0.289	0.299	0.239	0.202
GDB	単語種類	537	644	644	1326
	単語総数	2578	3059	2738	8375
	上÷下	0.208	0.211	0.235	0.158
TGB	単語種類	350	418	372	838
	単語総数	1576	1550	1402	4528
	上÷下	0.222	0.270	0.265	0.185

* CHILDESによる表記の中で、繰り返し[.]と未完成@は含んでいない。

*複数一括処理とは、調査対象者の1・3・5回目の発話データをひとつにまとめて出力したものである。

また、調査項目を含む発話データを例示するにあたって使用された特殊記号には、主に次のようなものがある。

- | | |
|--------------|-----------|
| ①次行に同時発話 [>] | ⑥未完成 @ |
| ②前行に同時発話 [<] | ⑦転置 „ |
| ③繰り返し [/] | ⑧上昇疑問符 -? |
| ④部分的な言い直し // | ⑨省略 () |
| ⑤誤用 [*] | ⑩不明瞭 xxx |

4. 結果

4.1 摂音便化について

表4 日本人大学生の発話に出現した摂音便と基本形⁽⁹⁾

	RRA	RRA	RRA	BHY	BHY	BHY	YTA	YTA	YTA	GDB	GDB	GDB
	I	III	V	I	III	V	I	III	V	I	III	V
摂音便												
wakannai	2	1		2	1					1	6	
wakannakatta											2(1)	
shinnai												
shinnakatta												
nannai						1						
nannakatta												
onnaji									1	1	1	
ironna	1	3	1	3	1		1	1	1			2
nammo		1	1						1			
- nchi								2	2	4	1	
amma		1	2			1				3	3	
ammari	4	1		3	1	2	2	2	1			
ammashi										2	4	3
基本形												
wakaranai		1			1	2					1	
wakaranakatta												
shiranai	1									1	1	
shiranakatta						1					2	
naranai						1	1					
naranakatta												
onaji	1	1					1				4	
iroiro na		10	5	1	1	1	1	2	7	1	1	2
nanimo		1								1		
- nichi	1		1							3		
amari			1									

*GDBの3回目の発話に出現した摂音便 (1) は、wakannaku natte kitaである。

表4を見ると、全般的に「わかんない（かった）」の使用頻度が「わからない（かった）」よりもやや高く、「しらない（かった）」「ならない（かった）」に関しては、ほとんど音便化が起きていないことがわかる。また、「あんま（し）」「あんまり」に関しては、「あまり」より、その使用頻度が極端に高い。

表5 中国人留学生の発話に出現した撥音便と基本形⁽⁹⁾

	FRK	FRK	FRK	SBR	SBR	SBR	ZYK	ZYK	ZYK	TGB	TGB	TGB
	I	III	V									
撥音便												
wakannai												
wakannakatta												
shinnai												
shinnakatta												
nannai												
nannakatta												
onnaji												
ironna			1				2					
nammo												
- nchi		2										
amma												
ammari				1		2			4			1
ammashi												
基本形												
wakaranai	2	1	3	1		2	1	1	3	3	5	3
wakaranakatta					1	2	1					
shiranai						1	6					
shiranakatta						2	2					3
naranai												1
naranakatta												1
onaji		2		1	1		2			1	2	1
iroiro na	4	2		6	6	5	1	1	3			
nanimo		1				2			1			
- nichi	1	1		1	1	1		1	4	1	5	1
amari			1			1					5	1

表5が示している通り、「わからない（かった）」「しらない（かった）」「ならない（かった）」「おなじ」「なにも」に関しては、基本形のみが使用されている。音便化が起きているものには、「いろんな」「～んち」「あんまり」があり、5回目によく見受けられる。

— (表5) ZYKの5回目の発話資料から—

- *YTA: Oosaka wa ne .
 *ZYK: hai .
 *YTA: ikoo ka ne tte [>] yuu keekaku [>] wa aru kedo Kyooto wa nanka ne .
 *ZYK: un [<] .
 *ZYK: un [<] .
 *ZYK: ammari suki janai .
 *YTA: i(i)ya i(i)ya itte mitai tcha kedo ne .
 *ZYK: un .

4.2 促音便化について

表6から明らかなように、「やはり」「ばかり」に関して、日本人大学生の発話には、音便化が頻繁に起きており、基本形はまったく見られない。

表6 日本人大学生の発話に出現した促音便と基本形

	RRA I	RRA III	RRA V	BHY I	BHY III	BHY V	YTA I	YTA III	YTA V	GDB I	GDB III	GDB V
促音便												
yappa	8	3	1	1	8	7	13	25	11	2	12	4
yappari	4		3		4	2	11	3	4			
yappashi										1	1	1
bakka								1				
bakkari	3	1	1		2	1	2		1			1
bakkashi												
基本形												
yahari												
bakari												

表7が示す通り、中国人留学生の発話の中で、「ばかり」に関しては、基本形のみが使用されているが、「やはり」については、逆に音便形の「やっぱり」しか使用されておらず、3回目以降に現れている。

表7 中国人留学生の発話に出現した促音便と基本形

	FRK	FRK	FRK	SBR	SBR	SBR	ZYK	ZYK	ZYK	TGB	TGB	TGB
	I	III	V									
促音便												
yappa												
yappari			8						4		1	
yappashi												
bakka												
bakkari												
bakkashi												
基本形												
yahari												
bakari	1	2	4	3		1				1		2

— (表7) FRKの5回目の発話資料から—

- *RRA: eQ nanka ne chuukaryoori tte ne .
- *FRK: un .
- *RRA: eQ su o ippai toru no ?
- *FRK: su wa i(i) ya hito ni yotte chigaimasu .
- *RRA: chigau no [>] ?
- *FRK: yappari [<] .
- *FRK: un .
- *FRK: uchi no hoo wa nanka [>] suppai mono ga daisuki na n desu kara [>]
nanka itsumo men toka .
- *RRA: un [<] .
- *RRA: un [<] .
- *RRA: un .
- *FRK: taberu toki su [>] wa ippai ni .
- *RRA: un [<] .
- *RRA: a(a) ippai ireru n da .

4.3 縮約形について

表8では、「こないだ」のように、「(連体詞) あいだ」の縮約形は見受けられるが、基本形は現れていない。「どこか」に関しても、縮約形である「どっか」のほうが使用頻度が高いことがわかる。

表8 日本人大学生の発話に出現した縮約形と基本形⁽¹⁰⁾

	RRA	RRA	RRA	BHY	BHY	BHY	YTA	YTA	YTA	GDB	GDB	GDB
	I	III	V									
縮約形												
kara	1											
kurai				2			1					
aida	1	2	1			1						1
toki		2	1						1			
dokka		2			2		2					
mon			1						4			
toko	4	11	5			1	5		6	1		
基本形												
kara	1			1					1			
kurai						1	1					1
aida												
toki		1				1						
dokoka	1											
mono	1		2	1	2	1					13	
tokoro				1		2				2	3	1

表9 中国人留学生の発話に出現した縮約形と基本形⁽¹⁰⁾

	FRK	FRK	FRK	SBR	SBR	SBR	ZYK	ZYK	ZYK	TGB	TGB	TGB
	I	III	V									
縮約形												
kara												
kurai												
aida												
toki												
dokka												
mon												
toko												
基本形												
kara												
kurai												
aida												
toki		1			3	4		2	1		7	2
dokoka					1							
mono		1	2			1			1	1	16	
tokoro	3	5	1	5	2		2	1	2	1	4	3

表9から明らかなように、基本形である「(連体詞) とき」「もの」「ところ」の使用頻度は高いが、それらの縮約形はまったく使用されていない。

— (表9) ZYKの5回目の発話資料から—

- *YTA: aa ja (a) kekkoo [>] iroiro mite mawatta n da [>].
 *ZYK: un [<].
 *ZYK: soo [<] [/] soo [/] soo .
 *YTA: e (e) Oosaka de wa Yunibaasaru itta n da kke ?
 *ZYK: aa sono toki jikan mo nai shi .
 *YTA: un .

— (表8) YTAの5回目の発話資料から—

- *YTA: koo@ [/] koosan no fuyu gurai kara arubaito shihajimeta n yo ne , , watashi .
 *YTA: son toki ni .
 *YTA: koosan toka ammari sonna okane tsukatte (i) nakatta ken .
 *ZYK: un .

— (表9) FRKの3回目の発話資料から—

- *FRK: ano(o) Chuugoku wa anoo nanka tochi ga .
 *RRA: un .
 *FRK: hiroi desu .
 *RRA: un [/] un sugoi [>] ne .
 *FRK: un [<] .
 *FRK: nanka iroiro na yuumee na yuumee na tokoro mo aru shi .
 *RRA: a(a) < soo na n > [>] da .
 *FRK: anoo [<] .
 *FRK: un .

— (表8) RRAの3回目の発話資料から—

- *RRA: machi toka itta n ?
 *FRK: machi ?
 *RRA: un nanka dokka .
 *RRA: soo da na .
 *RRA: kankoomeesho mitai na toko .
 *FRK: kankoomeesho ?
 *RRA: un .

4.4 アスペクトについて

表10 日本人大学生の発話に出現した「テ（イ）ル」

	RRA	RRA	RRA	BHY	BHY	BHY	YTA	YTA	YTA	GDB	GDB	GDB
	I	III	V									
(i) masu	3			1	3							
(i) mashita					1							
(i) ru	12	9	12	6	9	10	10	5	5	5	14	16
(i) te	4		1	3	4	1	1		1	1	1	4
(i) ta	2	5	8		5	1	3	1	2		19	9
(i) nai	5	2			3	1	1	7	4	4	5	8
(i) nakatta	1	1	1		5	1	1		1		3	1
(i) nakute			1									1
(i) naku							1					
(i) nakattara						1						
(i) tara			4					1				4
(i) tari			1						1			
(i) soo												1
計	27	17	28	10	30	15	18	13	14	10	43	43
÷ 単語種類(%)	6.40	3.74	5.83	2.71	6.49	3.90	3.35	2.07	2.37	1.86	6.68	6.68
÷ 単語総数(%)	1.23	0.85	1.22	0.79	1.81	0.96	0.75	0.50	0.56	0.39	1.41	1.57

* (%) は、小数点以下3桁目を四捨五入したものである。

表10・11を見ると、日本人大学生の発話の中では、圧倒的に「テイル」よりも「テ（イ）ル」が使用されていることがわかる。

— (表10) GDBの5回目の発話資料から —

- *GDB: sono hito kekkon shite (i)ru n da kedo nanka ne Nihon no -? .
- *TGB: un .
- *GDB: shufu no hito tte ne .
- *TGB: un .
- *GDB: nanka miryokuteki janai tte .
- *TGB: ee -? .

— (表10) BHYの5回目の発話資料から —

- *BHY: watashi ni wa mite (i)nai mitai , unten wa .
- *BHY: notte ku no ga yappari ichiban suki kana tte .
- *SBR: un .

*BHY: un .

*SBR: xxx .

*SBR: su@ [/] sore de mo ii yo ne .

表11 日本人大学生の発話に出現した「テイル」

	RRA	RRA	RRA	BHY	BHY	BHY	YTA	YTA	YTA	GDB	GDB	GDB
	I	III	V	I	III	V	I	III	V	I	III	V
imasu												
imashita												
imasen												
iru	6						2	1		1	1	
ite	3											
ita	1											
inai												
inakatta												
itara												
計	10	0	0	0	0	0	2	1	0	1	1	0
÷ 単語種類(%)	2.37	0	0	0	0	0	0.37	0.16	0	0.19	0.16	0
÷ 単語総数(%)	0.46	0	0	0	0	0	0.08	0.04	0	0.04	0.03	0

* (%) は、小数点以下3桁目を四捨五入したものである。

表12 中国人留学生の発話に出現した「テ（イ）ル」

	FRK	FRK	FRK	SBR	SBR	SBR	ZYK	ZYK	ZYK	TGB	TGB	TGB
	I	III	V	I	III	V	I	III	V	I	III	V
(i) masu												
(i) mashita												
(i) ru		1	1			1		1	1	1	1	8
(i) te											1	2
(i) ta					1				1		3	1
(i) nai					2	3		1	2	1	4	3
(i) nakatta					2	2					3	
(i) nakute												
(i) naku												
(i) nakattara												
(i) tara												
(i) tari												
(i) soo												
計	0	1	1	0	5	6	0	2	4	2	12	14
÷ 単語種類(%)	0	0.30	0.30	0	1.23	1.43	0	0.66	1.03	0.57	2.87	3.76
÷ 単語総数(%)	0	0.06	0.06	0	0.29	0.31	0	0.20	0.25	0.13	0.77	1.00

* (%) は、小数点以下3桁目を四捨五入したものである。

表12・13を見ると、中国人留学生の発話の中で、「テイル」の使用頻度が全般的に高いだけでなく、「テ（イ）ル」に関して、単語種類および単語総数に対しても、その使用頻度（%）が回を重ねるごとに着実に増えていることがわかる。

— (表12) TGBの5回目の発話資料から—

- *TGB: hayaku gakkoo e ikanai to ikenai kara .
- *GDB: so(o) ka .
- *TGB: un .
- *GDB: fuun .
- *TGB: demo nanka ranningu suru hito wa sukunai to omou .
- *TGB: minna benkyoo [>] shite (i)ru .
- *GDB: un [<] .
- *GDB: eQ .
- *TGB: un .

— (表12) SBRの5回目の発話資料から—

- *SBR: eeto Nihon ni kite mada nanka fukunok@ [//] fukonanoka [*] ee doko e mo itte (i)nai .
- *SBR: un .
- *BHY: aa so(o) ka [>] .
- *SBR: zannen [<] ne .
- *BHY: un [/] un [/] un .

表13 中国人留学生の発話に出現した「テイル」

	FRK	FRK	FRK	SBR	SBR	SBR	ZYK	ZYK	ZYK	TGB	TGB	TGB
	I	III	V									
imasu	4			3	2		3			9	2	
imashita	1											
imasen	1			2								
iru	2	1		1		1		1	8	4	12	7
ite					2	1			1			
ita			3		1			1	3			
inai				1		1		1	1			
inakatta					1							
itara									1			
計	8	1	3	7	6	3	3	3	14	13	14	7
÷ 単語種類(%)	2.84	0.30	0.91	1.75	1.47	0.72	1.16	0.99	3.61	3.71	3.35	1.88
÷ 単語総数(%)	0.80	0.06	0.19	0.40	0.35	0.15	0.34	0.30	0.86	0.82	0.90	0.50

* (%) は、小数点以下3桁目を四捨五入したものである。

5. 考察

表4と表5の分析結果から、中国人留学生の発話の中では、「あんまり」が相対的によく使われていることがわかったが、それに比例して、日本人大学生の発話でも「あまり」の音便形が多用されているのは興味深い。また、長友(2002)は、フィリピン人自然習得者に限定して、日本語学習者が「わからない」「わかんない」などの位相表現を使い分けていると述べているが、本調査では、日本人大学生が「わからない（かった）」「わかんない（かった）」を併用しているのに対して、中国人留学生は、一貫して「わからない（かった）」を使用していた。

次に、表6と表7の結果を見ると、日本人大学生、中国人留学生ともに「やはり」の使用は認められなかったが、これは「やはり」が音便形の「やっぱり」より、丁寧度が高いためだと思われる。また、日本人大学生の発話には、「やっぱ」「やっぱり」「やっぱし」という撥音便の異形が現れているが、中国人留学生の発話の中では、「やっぱり」のみが使用されているのは興味深い。更に、「やっぱり」と同様、4拍の「ばっかり」が使用されていないのは注目に値する。

表8と表9の結果からは、単独あるいは後続の語との音韻環境を考慮しても、語末<- (r)o>の省略に関して、中国人留学生の発話には影響を及ぼしていないことがわかる。

最後に、表10から表13までの分析結果から、日本人大学生がアスペクトの「テイル」より「テ（イ）ル」を頻繁に使用しているのに対して、中国人留学生は、最初に「テイル」を使用し、後に「テ（イ）ル」を混用していることがわかる。これは日本語母語話者によるインプットの影響だけでなく、Crystal(1997: 335)が述べているように、調音の容易さが要因として考えられるかもしれない。事実、会話後のフォローアップ・インタビューでは、「まわりの日本人が話しているから。」「簡単で、言いやすいから。」という声が聽かれた。

6. おわりに

本稿では、言語接触という観点から、日本語学習者による語彙の音便化や縮約について分析を試みた。少数の学習者を対象とした縦断調査であるため、

分析結果を一般化できるわけではないが、本国でのフォーマルな日本語学習から日本というインフォーマルな日本語環境に接触することによって、外国人留学生の日本語が変化していく様子を捉えることができた。

特に、音便化に関して、日本人大学生と同様に中国人留学生の発話の中で、概して使用頻度が高いものとして「あんまり」「やっぱり」があげられる。その一方で、日本人大学生とは対照的に、「わからない（かった）」「ばかり」の音便形である「わかんない（かった）」「ばっかり」は、中国人留学生によって使用されていないことがわかった。

縮約形についても、日本人大学生と比較すると、語末<- (r)o>の省略が中国人留学生の発話には見られなかった。

最後に、アスペクト形式に関して、中国人留学生の発話の中では、滞日期間が長くなるにしたがって「テイル」から<イ>が省略された「テ（イ）ル」の使用が着実に増えていることがわかった。これは本調査および西・白井（印刷中）からも明らかなように、日本語母語話者が「テ（イ）ル」を頻繁に使用しているためだと思われる。したがって、日本語自然習得者が「テ（イ）ル」を多用しているという調査結果（菅谷2003）は予想されるところだが、もう一方の教室習得中心の学習者（来日後、日本語学習を開始している）は、日本語母語話者から非形式的なインプットにさらされているにもかかわらず、「テ（イ）ル」の使用が顕著に現れていないのは何故だろうか？また、李（2002）と橋本（2002）は、韓国語母語話者および英語母語話者の「テイル」「テ（イ）ル」の使用について、スタイル切換えの観点から考察を加えているが、その調査結果からは明確な差異が読みとれない。日本語母語話者との接触による言語変化だけでなく、意識的に日本語学習者が「テイル」「テ（イ）ル」に関して、コード・スイッチングをおこなっているのかどうか、今後の研究課題としたい。

謝辞：本稿のCHILDESによるデータの表記法および分析にあたり、愛知淑徳大学の宮田スザンヌ先生から貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- (1) 本来の研究データは、会話資料、日誌、アンケート、言語テスト、フォローアップ・インタビューなどから成り、日本語学習者の居住地方言に対する意識と产出能力のみならず、言語および異文化接触の観点から、複合アプローチを用いて多角的に分析している。
- (2) フォーマルな日本語学習とは、教室での丁寧体を中心とした学習形態を指す。
- (3) 対象者の日本語能力を測るために、過去の日本語能力試験2級の問題を使用した。
- (4) 調査後半に受験した日本語能力試験1級（平成14年度）では、全員が合格であった。
- (5) 本稿では、そのうち1回目と3回目と5回目の結果を紹介する。
- (6) 中国人留学生と日本人大学生の組み合わせは、FRK/RRA・SBR/BHY・ZYK/YTA・TGB/GDBである。
- (7) 調査項目の表記法（アルファベット）は、CHILDESの分かち書きガイドライン2002に沿ったものである。
- (8) Johnstone (2000: 33) は、収集されたデータから研究テーマを見出すこともあると述べている。
- (9) 調査項目の詳細については、下記の通りである。
 - * - nchiは、ichinichiのように、日を表す語の中で撥音化が起きているものを含む。
 - * - nichiは、ichinichiのように、日を表す語の中で撥音化が起きていないものを含む。
- (10) 調査項目の詳細については、下記の通りである。
 - * 縮約形と基本形のkaraは、kok(o)/koko karaのように、代名詞と接続しているものを含む。
 - * 縮約形と基本形のkuraiは、kon(o)/kono kuraiのように、連体詞と接続しているものを含む。
 - * 縮約形と基本形のaidaは、kon(o)/kono aidaのように、連体詞と接続しているものを含む。
 - * 縮約形と基本形のtokiは、kon(o)/kono tokiのように、連体詞と接続しているものを含む。
 - * 縮約形と基本形のmon/monoは、oishii mon(o)/monoのように、形式名詞は含まない。
 - * 縮約形と基本形のtoko/tokoroは、omoshiroi toko(ro)/tokoroのように、形式名詞は含まない。

参考文献

- (1) 浅田浩文 (2004) 「日本語学習者の方言意識と产出能力—CHILDES談話資料—」 平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究C-2 (課題番号13680366) 研究成果報告書
- (2) 李吉鎔 (2002) 「韓国語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4, 73-93.
- (3) 川口良 (1993) 「日本人および日本語学習者による副詞「やっぱり」の語用論的前提の習得について」『日本語教育』81, 116-127.
- (4) 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「一ティル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, 37 - 48.
- (5) 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による「一ティル」の習得研究：OPIデータの分析結果から」『日本語教育』104, 20 - 29.
- (6) 許夏珮 (2002) 「日本語学習者によるティタの習得に関する研究」『日本語教育』115,

41 - 50.

- (7) 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における「一テイル」の習得について」『日本語教育』87, 153 - 164.
- (8) 国際交流基金 (2000) 『平成11年度日本語能力試験1・2級試験問題と正解』凡人社
- (9) 真田信治・渋谷勝巳・陣内正敬・杉戸清樹 (2000) 『社会言語学』おうふう
- (10) 柴田美紀 (1998) 「日本語学習者の談話におけるテンス・アスペクトの形態素の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』2, 68-101.
- (11) 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に—」『日本語教育』119, 65 - 74.
- (12) 長友和彦 (2002) 「教室内日本語学習者の可能性と限界：日本語の自然習得研究が示唆するもの」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成12-13年度科学研究費補助金萌芽的研究（課題番号12878043）研究成果報告書9-18.
- (13) 西由美子・白井恭弘（印刷中）「会話における「ている」の意味：アスペクト二構成要素理論による分析」南雅彦編『言語学と日本語教育3』くろしお出版
- (14) 橋本貴子 (2002) 「英語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4, 94-113.
- (15) 嶺岸玲子 (1999) 「日本語学習者への縮約形指導のめやす—日本人による評価と使用率をふまえて—」『日本語教育』102, 30 - 39.
- (16) Crystal, D. (1997). *The cambridge encyclopedia of language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- (17) Johnstone, B. (2000). *Qualitative methods in sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- (18) MacWhinney, B. (1995). *The CHILDES project: Tools for analyzing talk* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- (19) Oshima-Takane, Y. (1995). *CHILDES manual for Japanese*. Montreal: McGill University.
- (20) Shirai, Y., & Kurono, A. (1998). The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48:2, 245-279.